

私の保育

——一日一日をふりかえりながら——

向山陽子

三月——又、区切りの時がきました。子ども達と私との一日の積み重ねの生活が、終わりになり、子ども達が卒園していく日が近づいてきました。

この頃になるときまつて子ども達の入園してすぐの頃を思い出すのが不思議です。

「別れ」の時には、「出会い」を思い出すのでしょうか……。

◎ 今日のこと

私は、去年も年長児を担任し、今年も再び、年長組、まつ組十三二名を担任しています。

暖かい朝です。登園後、朝の用意（うがいをし、コップとタオルをかけ、弁当を暖飯器に入れて、かばんをロッカーへかけ

る）をすませて、身体測定をしました。外国へいつている二人を除いて全員出席です。測定を終えた子ども達は、外へとび出していきました。全員を測り終えた頃には、リズム室と保育室には、積木で間取りをした、広い家が二軒（女子十名、男子三名）。ジャングル・ジムには、三日前から始めた、ござ屋根、積木の板の床や壁のあるマンション。（男子八名、女子一名）U子は他の人の食事をつくる人だそうです。雲梯には、鞆柄のビニールをかけて、レストラン（男子三名）。その近くのヒューム管では男子六名女子一名が、お金をつくっています。どうやら、レストランの開店を待っているようです。

それぞれの「家」を基地にして、交流がはじまりました。山のすべり台に、ロープを結んで、ロック・クライミングに出かける

もの。砂あそびに出かけるもの。マンションから車で出かけ、途中、雲梯のレストランで、食事をとるもの。二階のリズム室の家からは、ジャングル・ジムのマンションづくりに必要な、大積木の板を運び出し、大工さんきどりで、「出張販売及び、とりつけ」をしていくもの……。

都心の幼稚園としては、広い敷地を持つ園中を使って、いくつかのごっこ遊びが、つながっていききました。

私は、保育室の「家」のベランダで、T子、M子、F子と粘土板や、ままごと道具を洗っています。卒園にむけての大そうじの一環として、家ごっこを利用させてもらっているのです。

卒園間近い一日、私の手助けを必要とせず、クラスの和ができ、一人一人の満足が、広がっていくのが、感じられます。

「先生！ 食べにきて！！」レストランから、声がかかります。

「先生！ 見て！！」砂場から、年中組とつないだ大きな川を誇る声があります。

「先生！ 呼び鈴はこれだよ。遊びにきていいよ！！」

ついこの前まで、トラブルがおこると「先生！！」必要なものがあると「先生！！」だったのに、今日は、お客様としてしか、私の存在を必要としくれません。

嬉しいような、居場所がなくて寂しいような気もちです。

今日は、卒園記念にと思って全員がつくった紙版画「顔」の印刷と、模造紙の上に子ども達を踊らせ、ストップをかけて、等身大の型をとることを計画していましたが、遊びにストップをかけて、私の側の計画を入れる気にはなれない、いい一日です。

さくら組（年中組）が、シューメーカーダンスとタタロチカを踊り出しました。園中に、リズムカルな曲が流れ、それを、ききつけたM子たちが踊りの輪の中へ入ってききました。

居場所のなかった私もこれ幸いとばかりに踊り出しました。年中児と年長児、年少児も踊ります。二十数名に踊りの輪は広がりました。何度もくり返し踊ります。パティケーク・ポルカを年中児に教えてあげる年長児達、とても幸せな眺めでした。

◎ 子ども達に教えられて

去年の今頃の私は、残された日数で残された課題（あの子には、こうなってほしい、この子には、この点を身につけて卒園させたい。etc）に、毎日を追われていたように思い出します。このような姿勢で臨む限り、成長している子ども達の課題にはかり目がいき、成果も上がらなかつたようです。

去年と比べると、今年の私は、子どもの成長を喜べており、楽しく毎日を送れています。もちろん、子ども達一人一人の次への

成長の課題はあります。

でも、それだけに追われず彼らの成長を喜べるのは、最近になって、子ども達に教えられた数々のことが、私に大きく影響しているようです。

。 H君のこと

三学期になって、H君がゆったりと、彼の良さを、發揮できています。二学期後半、受験と父親の入院が重なり、幼い彼には、重すぎる負担がかかっているようでした。私と二人きりで、遊ぶと、子どもらしい発想の、やさしいH君なのに、お友達を泣かせたり、けんかをしたり、彼のよさをひきだせないでいました。

冬休みに、私自身が、彼の良き理解者ではなかったと反省しました。実際に、彼にむかう時の私は、叱る顔の方が多かったのではないかと気づいたのです。

私にとって、長期の休みは、有難いもので、綿々と続く日々の保育に、空白期間を作ってくれます。連続する毎日には気づかなかったことに気づかせてくれます。

三学期は、子ども達に、とりわけ、H君に、叱らないで、保育することを目標にしました。

休みがあけて、すぐの半日保育の日の事です。半日保育の日は、遊びをきり上げられずに、片づけにまで、遊び続けることがあります。その日、帰る用意ができた後でH君が戻ってきたのです。

今までの私なら「遊んでいて遅れた」とうけとめたでしょう。でも、その日の私は、H君は最後まで、片づけてきたから遅れたと、うけとめる事が、できたのです。彼にいうと、「ウン、だって、先にいっちゃうんだもん。」と顔を輝かせました。

私は、H君としっかりと、つながった事を確信しました。

翌日から、彼は『エルマーのぼうけん』の地図を、じっくりと描き出しました。

家庭状況もおちついたのでしょう。友達とのトラブルも減ってきました。

保育者の見方一つで、子どもの長所を引き出せることを、身をもって知ると同時に、逆も成り立つ訳で、心をひきしめました。

。 H君とY君のこと

Y君は、まつ組の生き字引きです。鳥、魚、動物etc.の事をよ

く知っています。

「反面、運動が苦手で、サッカーや、活発なごっこ遊びに入っても、いつの間にか、ぬけてしまったり、仲間入りができずに、近くでウロウロとしています。」

私が、手助けしようとする、「いいんだよ。僕、入りたくないんだよ。」と、ごまかしてしまいます。

H君と、S君が、雲梯の下で、レストランをはじめました。

白砂は塩、黒砂は、しょうゆ、混ぜた砂はこしょうにして、楽しそうです。そこへY君がきました。S君とY君は降園後、よく一緒に遊びます。Y君は、S君がいるので入ったつもりになっています。そんなY君に、

H 「お前は入っていないぞ!!」

Y、何を言われたかわからず、ニコニコ。

H 「仲間じゃないだろう。俺達のレストランだから。」

Y、H君の言葉の意味がわかりません。

私 「H! いじわるだな……。」

H 「だめだよ!!」

Y、ブンと怒って出ていく。

私 「Y!! 待ちなさいー!」

Y 「ほくいんだもん、入りたくないんだもん。」無理をして

いる顔です。

私 「Y!! ごまかすのはやめなさい。どうして、もっと入りたいんだって言わないの!!」

Y、もどる。黙って又、雲梯の下に入る。

H 「やめろよな!!」とYを押し出す。

H、自分の言動の本当の意味が通じていないと気がつきあわてて、

H、「入れて」っていわないんだもん、「入れて」っていえば

いいんだよ。」

Y、今さら言えるか! とばかりにブーツと怒る。

私 「裕!!」

Y、小さな声で「入れて」

H 快く、「いいよ」

Yは、こぼれそうな笑顔で、仲間に入りました。言葉が足りなくて、誤解されやすいH君。本当は、ルールを守っただけの、やさしい人なのです。

「入れて」の一言が、こんなに大切な言葉だなんて、Y君もよくわかりましたね。

私も教えられました。

。A君に教えられた「待つこと」

当園には、年長児対象の体育正課があります。週に一回、男の先生に、体育あそびの指導をうけるのです。

その日は、ボールあそび。準備体操の時に、C君と、R君がけんかをはじめました。早く流れにもどそうと、私の気持ちは動きました。見学のA君が、仲裁に入りました。「見学の人は、見ていなくてはいけない」又、私の気もちは動きました。今にもとびだして注意しそうになる自分を、必死でおさえました。

A君の仲裁は、忍耐強く、何度も互いの意見をきき、原因がボールのとりあいだとわかると、別のボールを探していくのです。C君も、R君も、A君に心を許し、ポートボールがはじまった時には二人とも笑顔で参加していました。

私が口出したのでは、きっと無理矢理流れにおしこめていたでしょう。

子ども達の成長に感激しながら、子どもの成長を信じて、黙って待つという事を教えられました。

気づかぬうちに、無用な言葉を、どんなに多く、発しているか、恐しくなると同時に、黙って待つ事が、いかに難かしいかも知りました。

。おわかれ発表会

当園では、年長組だけが、発表会を行ないません。日常の保育の総まとめとして、子ども達の負担にならない、楽しいものにして、と毎年話されますが、その実現は、大変難しいものです。型を教師がきめて、子どもをその中に入れるか、子どもの発想を生かして、つくるか……。去年は、前者だったので、今年は、難しい後者に挑戦してみました。

題材は、二学期に読んで皆が大好きな『ももいろのキリン』にしました。紙でキリカや、動物達をつくり、職員室の窓にはったこともあり、照れ屋の多いまつ組にはベープサートがいと思います。

はげちよろけの動物達とキリカがクレヨン山へいって、オレンジぐまをやっつけ、クレヨンで、きれいになる場面を中心に、前後は、何人かの「るるこ」が、語ることになりました。

私が作った骨組みに、子ども達は、次々とアイデアを出してくれます。

・題は「キリカのおはなし」にして、看板を、るるこ達が、首から下げて出てくる事。

・ベープサートを持って、這って出てきたへびのT君。

・クレヨン山へいく時のうたを考えたK君。

・オレンジぐまをひもで引いて、とはす事。

・最後にゐるのが「ハイ」「お」「し」「ま」「い」と背中に付けて、皆の声にあわせて、クルッ、クルッと、後をむくこと etc.

クレヨンの木や、ペープサートも、全員の手で出来上りました。

子ども達はのりにのっているけれど、私は内心の葛藤の連続でした。期間を充分にとれば、もっともっと煮つまつたでしょう。春のような暖かな毎日なのに、練習だけに縛りつけたくないし、でも、見せるための劇としては、今一つ、整然としていないことが気になるし……。

「他と比べず、自分の成長を喜べる人に!!」いつも、子ども達に願っている事が、私自身の課題になりました。

本番が終わっても、出来映えを他と比べているのは私でした。御父兄は、子どもらしいアイデアを喜んで下さったし、子ども達は、本番の後、春の庭で、砂や、土に接して、「しっとり」と、睦まじく」の言葉が似あう姿で遊びこんでいました。

今年できなかった部分は、来年度の保育の課題として、しっかりと心に記し、まだまだですが、去年よりは、一人一人を大切にできたという私自身の成長を、しっかりと見つめたいと思っています。

今、思い出しても、ホッと胸をなでおろすのは、I子のことです。活発で、利発なI子は、希望で、クレヨンやへびになっていました。そのI子が「何が何だかわからない。」といい出したのです。心にかかりながら日は過ぎていきました。本番の二日前の朝、駅のホームで気がつきました。「I子は、ゐるこになりたいたいのでは……」

お弁当の時、I子は、「キリカのおはなし」をはじめから暗唱しています。「I子、ゐるこになってもいいわよ。」というとき、I子は、みるみる輝いてきました。I子は自分でせりふを考えて、すでに決まっていた四人のゐること自主練習をはじめたのです。当日、I子の元気のいい声にホッとしました。

“せんせい”になって、六年がすぎようとしています。

「子どもに教えられながら、教師も成長していくこと」

「父兄と理解しあい、支えられてこそ、いい保育ができること」
が、おぼろげながらや々と実体験でわかりはじめた私です。

私の保育のためにはじめた「週毎の六領域の点検表」と、「日案と記録」を、私自身の成長の記録として、一日一日をていねいに振り返りながら記し続けたいと思います。(東京・大和郷幼稚園)